OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	モードを検証する ： 川久保玲・初期の創作にまつわる言説と実際
Author(s)	安城, 寿子
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 158-159
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52849
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

モードを検証する
── 川久保玲・初期の創作にまつわる言説と実際 ──

安城寿子／学習院大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士前期課程修了生

川久保玲は，1980年代にパリ・プレタポルテ・コレクションへの進出を果たして以来，現在に至るまでCOMME des GAÇONS（コムデギャルソン）のブランド名で衣服発表を行っているファッション・デザイナーである。

川久保は，穴や裂け目といった破壊的意匠と黒を基調とする色使いを特徴とする衣服によって80年代初頭のパリ・モード界に衝撃を与え，同時にそのコレクションは激しい批判に晒されたと言われている。この手の言説はこれまで様々な媒体において繰り返し語られてきたもので，半ば神話的な定着を見せていると言えるのだが，彼女の初期の創作の具体的内容，それに対する同時代の評価のあり方，そしてそれらを取り巻いていたモードの同時代的状況が実際どのようなものであったのかということに関する具体的な検証は，これまでほとんど試みられてきていない。

本発表は，当時のフランスで刊行されていた新聞・雑誌資料の検証を重視しつつ，これらの点の詳細に光を当てようとするものである。

■川久保玲，初期のコレクションの概要

川久保が虫喰い穴のような意匠を伴う黒い衣服を手がけたのは，82年3月に発表された82年秋冬コレクションのことである。彼女は続く83年春夏コレクション（発表は82年10月）においても，白と黒を基調に置き，裂け目のような意匠の見られる衣服を複数発表しており，また，モデルに火傷か痣のようなメイクを施すという演出を加えている。

現在川久保の初期のコレクションのイメージとして一般化しているカタストロフィーを想起させるような衣服や演出を確認することができるのは以上二シーズンのコレクションであるが，彼女がこれらのコレクション以前にパリで発表していた二つのコレクションの存在はあまり知られていない。

川久保は81年4月，小規模ながらパリにおける最初のコレクションを発表しており，同年10月にはパリ・クチュール組合への正式な加盟の上，82年春夏パリ・プレタポルテ・コレクションに参加し，衣服発表を行っている。81年4月発表のコレクションではズボンの裾を絞ったジャンプ・スーツが，82年春夏コレクションでは，藍や紺，生成りを基調に置いたワンピースやアンサンブルがその中心となっており，82年秋冬及び83年春夏コレクションに見られるような奇抜な試みは未だ登場していない。が，そこには布のくたびれたような質感や形態の左右非対称性，身体と衣服の間に現れるゆとりの大きさなど，その後の彼女のコレクションを特徴付けるいくつかの要素が確認されることから，これらの要素にさらなる破壊的・暴力的な表現が加えられた82年秋冬コレクションや83年春夏コレクションは，その延長線上に位置づけることができるだろう。

■フランス・ジャーナリズムにおける反響

フランスのジャーナリズムが，川久保手がけるコムデギャルソンのコレクションに対する反応を示し始めるのは，82年10月の83年春夏コレクション発表以降のことである。

それ以前のコレクションに関する批評が見

られるのは左翼系日刊紙の『リベラシオン[Libération]』ぐらいのもので，現在川久保の衝撃的コレクションの代表として紹介されることの多い82年秋冬コレクション発表後の新聞・雑誌上にすら，それが取り沙汰された形跡は認められなかった。

コムデギャルソンの83年春夏コレクションが発表された後は，前出の『リベラシオン』に加え，『ル・フィガロ[le Figaro]』『ジュルナル・デュ・テクスティル[Journal du textile]』『ジャルダン・デ・モード[Jardin des Modes]』『エル[ELLE]』など，多くの新聞・雑誌がその内容を報じ，あるいはそれに批評を加えており，パリにおいて発表された四回目のコレクションに至って，コムデギャルソンへの注目度は一つの高まりを見せたと言うことができるだろう。

特筆すべきは，その論調の大半が，破壊的な意匠やショッキングなメイクなどの演出を伴う川久保のコレクションに，好意的な評価を与えていることである。この時，あるものはモードの世界における日本勢の台頭という出来事への懸念を示し，また既に指摘されているように，保守系日刊紙である『ル・フィガロ』は彼女のコレクションを「衣服の黙示録」，「核の惨禍の生き残りのよう」として退けている。しかし多くの記事は，彼女のコレクションの内容に対して，新たな一つの美学あるいは「日本の伝統文化」を具現した表現として一定の評価を与えており，このコレクションに当時注がれていた眼差しは，比較的暖かいものだったのではないかと考えられる。

■パリ・モードの同時代的状況

パリ・モードはしばしば，「女性身体を拘束的に包み込む華やかな衣服が生み出される世界」というイメージのもとに語られてきた。そして，前述のような川久保の初期のコレクション，とりわけ82年秋冬コレクションと83年春夏コレクションの衣服に見られた無彩色中心の色使いや穴や裂け目といった破壊的意匠，身体との間の遊動空間が大きく取られた形態などの特徴は，このイメージとの対置によって，当時のパリ・モードにおける異質な表現として位置づけられ，それゆえに衝撃たりえたという説明が加えられてきた。

しかしながら，当時の新聞・雑誌資料から浮かび上がってくる実際のパリ・モードの同時代的状況は，従来の言説において語られてきたそれとは内容を異にする部分があり，従って川久保の創作に関する従来の解釈や位置づけもまた，変更を生じうるものであると言うことができる。

とりわけ，この80年代前半という時期のパリ・モードには，自然体の美しさや動きやすさを礼賛するナチュラル路線の衣服や，積極的なセックス・アピールを至上命題として革や肌に張り付くような素材を多様するセクシー・ルック，フォーマルな装いの提案としてのオーソドックスなスーツ・スタイルなど，多様な嗜好を持つ複数個のモードの潮流が並存しており，「華やかで拘束的」な統一的傾向を示す「パリ・モード」というものを想定すること自体が困難になっていたことに留意すべきである。そこでは，華麗なものと簡素なもの，拘束的なものと解放的なもの，控え目なものと奇抜なものなど，全く正反対の傾向を示し，美の基準を異にする衣服の流れが同時に「モード」として発信されている。

以上のような状況を踏まえるならば，川久保の初期のコレクションは，パリ・モードの転換を象徴する事件というよりもむしろ，それが既に多様化を見せていた時期であったがゆえに出現しえた，林立するモードの流れの一つを代表する事例として，位置づけることもできるのではないだろうか。